

おにぎりのぬくもり

和名「谷中学校 三年 粕川 穂乃佳

私には、忘れられない味がある。

それは、だいすきだ。たおばあちゃんが作

ってくれた、もう二度と食べることはできな

いおにぎりの味だ。

私の父方の祖父母の家は福島県にある。お

盆とお正月の年に二回、普段の生活では見る

ことのできない深い緑の山に囲まれた家に

父の三兄弟の家族全員が集まり、一緒にすじ

すことが毎年の恒例行事となっていた。

私にとっ、て、年の近いいとこに会えるのは

もちろん楽しみだ。たが、何よりも楽しみだ。

たのはおばあちゃんのご飯を食べられるこ

とだ。た。その中でも私が一番好きだ。たの

は、おばあちゃんが握るおにぎりだ。

具が何も入っていない、シンプルな塩おに

ぎり。おばあちゃんが作ってくれる味の濃

いおかかと一緒に食べると、よりおいしさが際

立った。これから先、どんなおにぎりを食べ

たとして、あの味を超えることはないだろう。初めて食べた時からずいぶん変わらない。今でも私が一番好きなおにぎりは、おばあちゃん握る塩おにぎりだ。自分の家に帰った後も、そのおにぎりが食べたくなると、自分で塩おにぎりを握ってみたり、力加減を間違えたりと、お米がつかれてしまったり、手に水をつけすぎて水分が多くなったり、しまったりと、なかなかうまく握ることができなかつた。しかし、おばあちゃんの握るおにぎりは、いつどんな時に食べても塩加減がちょうどよく、口に入れた瞬間にお米の甘さが口いっぱいに広がる、優しい味だ。その優しい味は、おばあちゃん性格そのものだ。たと思う。

おばあちゃん、誰かのために料理をすることが好きだ。夕方に一人、台所にこもり、夕飯の支度をする。自然に、はいのおばあちゃんの家でいとこたちと走りまわり、疲れきって家の扉を開けると

台所からおばあちゃんを作るご飯の匂いと、  
「おかえり」という優しい声でした。その幸  
せな瞬間が、私にと、て大切でした。

おばあちゃんのご飯の匂いをかいで、我慢  
できずに誰か一人がつまみ食いを始めると、  
全員が台所に押し寄せた。そんなときも、お  
ばあちゃんはまだニコニコと笑っているだけ  
だ。た。

みんなで「いただきます」をしたあとでも  
おばあちゃんは自分の食事など後回し。私に

ちがご飯を食べるところを、おと嬉しそう  
に見ていた。育ち盛りの孫が六人もいれば、  
山盛りには盛り上げたおにぎりも、すぐになくな  
ってしまふ。それどころか、足りなくなると  
おかわりをしたことも何度かあった。空にな  
ったお皿を眺めながら微笑むおばあちゃんの  
顔は、今でも忘れられない。

私はそんなおばあちゃんの顔を見つめた。び  
おいしそうなにくさんご飯を食べることが、  
こんなにも人を喜ばせられるのだと知った。

コロナウイルスの影響で、今までのようにみんなが集まることができなくなりました。今のあの時間は本当にかげがえのないものだった。と思う。一つの食卓をみんなで囲み、一緒に食事をあつむことは、私のバを温かく、優しくしてくれました。

欲を言えば、大人になってもあつと、おばあちゃんのおにぎりを食べていたか。た。最後に食べたご飯の味を、もつとかみしめておけばよかった。

でも、私たちの笑顔を見るためにご飯を作りました。つづけてくれたおばあちゃんには、後悔した。り、悲しんだりしている私を見たことはない。だから、私にはしたいことがある。

いつかおばあちゃんが立って、いたあの台所に立って、家族の笑顔を思い浮かべながら、ご飯を作ってあげたい。おばあちゃんが作ってくれたご飯のように、誰かのバにあつと残りつづける、そんな温かいご飯を作ってあげられぬ人になりたい。